
青二才の色

真浦塚真也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青二才の色

【Nコード】

N9622D

【作者名】

真浦塚真也

【あらすじ】

ぼくの色は草原とは違う。草原の色は海と一緒に。じゃあぼくの色は？

朝、起きた。

部屋の壁の色は水色。いや、大きなくりでいえばその色は青だった。

外へ出た。

一面草原だ。緑色だ。いや、緑色は青だ。

緑色のアレを青汁と言うように、今、目の前に広がっているのは青一面だ。

青が青々と茂っている。

少し歩くと海が見えた。

海は青だ。どう見ても青だ。青色だ。

ずーっと広がる青。ぼくはソレをしばらく眺めた。

顔を上げて上を見た。

空が見えた。青だった。いつも見える白はなく、空一面が青だった。どこまでも広がる青、海よりも広がる青。

ぼくはソレをしばらく眺めた。

少し顔を下げた。

地平線で青と青がぶつかっているのが見えた。いや、そこは地平線じゃないのかもしれない。

もしかしたら、そこはまだ海かもしれないし、そこはもう空かもしれない。

青と青がぶつかっている。青と青が重なっている。

同じ色が同じように見える。同じ色が同じ色を同じように真似ている。

ぼくはその一面のように見える場所をとりあえず地平線と名付けてしばらく眺めることにした。

しばらく眺めたあと、家に戻った。

家に鏡があつた。その鏡は程々に大きかつた。

ぼくは鏡を見た。

そこには肌色が写っていた。

どう頑張つても青にはなれない色。今まで見てきた色とは違つ色。これがぼくの色だ。絶対他の色にはなれない。青色にはなれない。

ぼくの色は何のためにあるのだろう。なぜこの色なのだろう。

青を際立たせるため？

「おまえは他とは違ふのだよ。」とぼくに教えるため？

そんなことを考えながらぼくは涙を流す。

その涙すら、ぼくのなれない青色だ。

しばらく泣いた。

どれくらいの時間が経ったかは分からない。

ふと顔を上げると太陽が西に沈みかけようとしていた。

あわてて外へ出た。

オレンジ色だつた。

皆、オレンジ色だつた。

家の壁も、草原も海も空も。

ぼくを見た。

ぼくも一緒だ。

ぼくも夕日でオレンジ色に染まっている。今も流れている涙だつて多分オレンジ色だ。

「やっと一緒になれたね。」

あの頃は皆と一緒にいるために必死だった。

不安だった。自分だけ他と違うのは。

『個性』と言って片付けられない劣等感があつた。

理由を尋ねられたらそうとしか答えられない。

今もそれは少なからずぼくの心に残っている。

いや、あふれようとするのを必死に隠しているだけなのかもしれない。

とにかく、あの頃は隠すなんてことは知らずただ不安をむき出しにしていた。

青に恋した青二才。

オレンジ色にホツとした青二才。

ソレを隠して大人ぶってる青二才。

ソレがぼくだ。そしてこれからもソレがぼくだ。

自慢できない青と隠した劣等感をもってこれからもぼくはぼくとして生きていく。

少しだけ青に恋しながら…。

（後書き）

多分誰もが感じることだと思います。少なからず僕はそうでした。
駄文を御覧いただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9622d/>

青二才の色

2011年1月7日15時50分発行